

バスケットボールの普及と発展に関する一考察
ールールと技術の変遷に注目してー
A study on the popularization and development of the basketball
~Focusing on the changes in rules and techniques~

1J02C155-2 多々良 一光
指導教員 主査 友添秀則 先生 副査 吉永武史 先生

<序章>研究の目的と方法

近代スポーツの一つとして知られるバスケットボールは、フロンティアスピリットに燃えていた時代のアメリカで考案されたものであり、今日においてはアメリカ国内のみならず多くの国々でプレーされている。これは夏季オリンピックの競技種目としても採用されていることや、統制団体である国際バスケットボール連盟（FIBA）による世界選手権が開催されていることから明らかであろう。しかしバスケットボールというスポーツが、考案から100年余しか経過していない今日において、既にこれほどの普及を遂げたのはなぜだろうか。考案当初、原則として身体接触の禁止を掲げていたはずのバスケットボールが、今日のような「激しい身体接触」の存在するスポーツとなったのはなぜなのだろう。また国際ルールにおけるスリー・ポイント・エリアの導入以降、バスケットボールのゲームは以前よりもさらに「ハイスコアリング」なゲーム展開が多く見られるようになったと思われるが、考案当初は「ロースコアリング」なゲーム展開が多かったバスケットボールがなぜ「ハイスコアリング」なゲーム展開が可能となったのか。これらを明らかにしていくことで、今日におけるバスケットボールというスポーツの持つルールの特性を明らかにし、今後のバスケットボールはどのような発展をしていくのかについて考察することを本研究の目的とする。

本研究は先行研究の調査による文献研究である。主としてバスケットボールについて史的研究を行っているものを対象とする。第1章ではアメリカにおけるバスケットボールにおける普及と国際的な普及についての考察を行い、第2章においてはバスケットボールのルールと技術の変遷について考察を行う。第3章においては、わが国におけるバスケットボールの普及と発展について考察を行う。

<第一章>

第1章においては、バスケットボールが考案された背景を明らかにするとともに、その考案から今日までの間、どのような過程を経て普及および発展したかを明らかにした。これにくわえて、考案から今日までの間どのようにルール改定が行われ、それらが必要とされた背景をも明らかにした。

<第二章>

第2章においては、第一に、バスケットボールにおけるルールの歴史的変遷を明らかにした。第2章ではさらに、

バスケットボールにおける特徴的なルールと関連があると推察される特徴的な技術についての歴史的変遷を明らかにした。

<第三章>

第3章においては、既に明らかにしてきたバスケットボールの歴史とその変遷を踏まえて、わが国におけるバスケットボールの普及と発展の経緯を、早稲田大学バスケットボール部の歴史と比較することにより明らかにした。

<結章>

ネイスミスがバスケットボールを考案した経緯から見ても、ゲームにおける特質として「ボール保持者の移動禁止」と「身体接触の禁止」を備えていたことは明らかである。しかし前者についてはドリブルという技術の登場により考案当初における厳格な意味での特質は失われてしまったと言って良いだろう。また、現行ルールにおいて前者は「合法的な手段を用いないボール保持者の移動禁止」に変容しており、言い換えれば、今日のバスケットボールは「ボール保持者の移動制限」という特質に変容していると考えるべきである。後者についても今日では大きく変容し「不当な身体接触の禁止」と特質に変容していると言わざるを得ない。

「ハイスコアリング」なゲーム展開を可能にした要素は、1) ショット技術の向上、2) ショット成功のための戦術の向上、3) ゲーム展開のスピード化を促すルールの制定という三つに集約されており、ここまで述べてきた技術とルールの変遷からも用意に推察できるだろう。

今後のバスケットボールは結論から言えば、ますます「長身選手の優位」と「ハイスコアリングなゲーム展開」が強まる傾向になっていくことが予想され2011年から採用される国際ルールでは、スリー・ポイント・エリアが最大でゴールから50cm遠くなる等の大きなルール改定が行われるが、既に導入されているNBAのゲームを見る限り、永続的にロースコアリングな傾向を導くルールとなるかは甚だ疑問である。これまでも「長身選手優位」を払拭しようとしたルール改定はたびたび行われてきたが、その傾向が薄れた過去はなく、ゴールを設置する高さを変更するか、ボックスのような階級制度（この場合は身長による階級区分となるが）を設けないことには、今後のバスケットボールが「長身選手の優位」と「ハイスコアリングなゲーム展開」から変容を遂げることはないだろう。